



妻沼中キャラ めにちゃん

学び磨き鍛える

正しい判断力とたくましい実践力を
もった妻沼西中生を育む学校

発行 熊谷市立妻沼西中学校
電話 048(588)1361
FAX 048(589)0496
令和8年9月15日
第11号

254年前の道しるべ ～『利根路の秋旅』(高山彦九郎 著) から

校長 清水 利浩

妻沼西中の北西の端に、今から254年前(明和9年(1772)建立)に建てられた「道しるべ」の石碑がある。この「道しるべ」には、北の方向に進むと、「出来島河岸」に至ると刻まれている。

この「出来島河岸」は、どのような場所だったのか。出来島河岸から船に乗って、江戸に向かった高山彦九郎という人物がおり、安永4年(1775)に、『利根路の秋旅』という日記を残している。驚いたことに、この道しるべの石碑が建てられた時期とほぼ一致している。私は、高山彦九郎と『利根路の秋旅』を調べてみようと思い、『太田市立高山彦九郎記念館』にいった。学芸員の方々が丁寧に対応していただき、資料



を提供していただいた。日誌に書かれている行程は、以下のとおりである。

- ・7月8日(夕方)太田市細谷町を出発…小島…<利根川を渡る>…妻沼台(剣持さん宅泊)
- ・7月9日 台村…出来島河岸(正午前→午後2時)…<利根川>…小島(午後4時発)…(夕方)葛和田河岸(船中泊)
- ※船について
- ・7月10日 葛和田河岸(午前8時)…<利根川>…(午後4時前)栗橋宿(船中泊) ※朝食について
- ・7月11日 栗橋宿(早朝発)…<利根川>…(午後6時)関宿御番所…<江戸川>…(夕暮れ)松戸宿(船中泊)
- ・7月12日 松戸宿…<江戸川>…行徳河岸…<中川>…<小名木川>…日本橋 7月13日～16日 江戸に滞在
- ・7月17日 江戸発…板橋宿…<中山道・馬乗>…大宮宿…<中山道・馬乗>…(午後4時)鴻巣宿(泊)
- ・7月18日 鴻巣宿…<中山道・馬に乗る>…<館林道>…行田…中条…須戸…江波…妻沼…妻沼台(正午前)…(渡し)…小島…細谷 ※聖天様 ※妻沼では聖天様に立ち寄っている。

さらなる問いが生まれてきた。①帰り道の陸路:江戸での用事を終えた後、帰りは中山道(陸路)を歩いて、1泊2日で帰ってきている。資料には、陸路であれば、道中の宿場町で新たな知人と出会ったり、地域の状況を直接見聞したりできるためと書かれてある。ではなぜ、行きは出来島河岸から、船旅を3泊4日もかけて江戸に向かっているのか。値段が安かったのか。その理由はこの日記からは読み取れない。②船の荷物は、大豆の俵と薪である。このことから、妻沼での特産品が大豆だったのか。③この川船は、出来島が始発だったのか、さらに上流からやってきているのか。妻沼西中に立つ石碑から、いろいろな問いが生まれてくる。

<参考> ○「河岸」は、川の船着き場のことで、人や荷物を運ぶ場所を意味している。河岸には、市場ができ、人々が集まる。現在でいう鉄道の駅や、海の港や空港である。 ○高山彦九郎は、現在の群馬県太田市に生まれた、江戸時代の武士である。 ○日記に記されている船の長さは、13間(15m)。船の先の方には、宿泊や自炊する船室がある。また、「へっつい(かまど)」もある。通常の荷物は、米350俵であるが、今回は、大豆72俵と薪300束を積んでいる。※明治初年につくられた郡村誌によれば、出来島村の物産に、大豆45石5斗と記されている。('出来島村誌'P29) ○※朝食は、茶漬けをいただいている。 ○写真は、太田市立高山彦九郎記念館の特別展「高山彦九郎日記『利根路の秋旅』」(平成30年)のパンフレットから抜粋